

西行自歌合注釈（五）

武田 元治

前稿に続いて、『宮河歌合』の二十一番以下をとり上げる。

二十一番 左持

四一ま菅おふるあら田に水をまかすればうれしがほにもなく蛙かな

右

四二水たたふ入江のまこもかりかねてむなでに過ぐる五月雨の比

左右、心姿同じさまの事に侍るべし。あら田に水をとひひ、むな手にすぐるといへるは、いづれもいひしりて聞え侍れば、よき持にて侍るめり。

【通釈】

二十一番 左持

四一菅の生えた荒田に、水を引きこむと、うれしそうな声で鳴く蛙よ。

右

四二水を一杯たたえた入江の真菰を、刈ることができず、手を遊ばせて毎日の過ぎる、五月雨のころよ。

左右の歌は、その心も姿も同様のものでしょう。（左の歌に）「荒田に水を」と詠み、（右の歌に）「むなでに過ぐる」と詠んでいるのは、いずれも適切な言い方を心得た作と思われしますので、共によい歌で持ということになるかと思えます。

【注】○ま菅 「ま」は接頭語で、菅のこと。「菅」は、カヤツリグサ

科の草で、葉は細長い。夏に刈り、蓑・笠などを作るのに用いた。○あら田 「荒田」で、長く耕作せず荒れた田。「新田」で、新しく開墾した田とも見られる。用例は、『拾遺集』の「あづさゆみ春のあら田をうち返し思ひやみにし人ぞこひしき」（八一）、よみ人しらず）、『山家集』の「誰ならんあらたのくろにすみれつむ人は心のわりなかるべし」（一六〇）など。○まかすれば この「まかす」は、田や池などに水を引く意の下二段活用動詞。○まこも 真菰。「ま」接頭語で、「菰」とも。水辺に生えるイネ科の大型の多年草。葉はススキに似ており、刈り取ってむしろを編むのに用いた。○むなでに 「むなで」は「空手」で、手に何も持たないことを意味する。ここでは手を遊ばせて、なすこともない様子を言ったと見られる。○五月雨の比 さみだれのころ。○いひしりて 「言ひ知る」は、適切な言い方を心得ている意。○よき持 ここでは、番えられた二首が共によい歌で優劣のないこと。

【考察】二十一番は、左が蛙の歌、右が五月雨の歌である。蛙は晩春の季節、五月雨は夏季のものとして一般に扱われる。

二首ともに『山家集』に見え、左歌（一六七）は二句「やまだに水を」の形で「かはづ」の題、右歌（二〇七）は二句「いは間のまこも」の形で「さみだれ」の題で出ている。なお左歌は、『西行上人集』（二二六）、『山家心中集』（一九〇）にも見え、これらも題は「かはづ」である。『風雅集』（二六八）には「春の歌の中に」として収められている。

左の歌の「かはづ」は、古代の和歌に多く詠まれている河鹿^{かしか}ではなく、田にいる普通の蛙である。その蛙が、昔の生えた荒田に水を入れると「うれしがほに」鳴くと詠んでいる。農民の生活感情に基づいて素直に詠まれている点に特色が認められる。

右の歌も、同様の特色をもつ歌であろう。中古の和歌の「五月雨」は、物思う心と共に詠まれることが多いが、この「五月雨」は、満々とたたえた水のために真菰を刈ることができず「むな手に過ぐる」という、農民の生活に結びつくものとして率直に歌われている。その点、左右の歌は西行の独自性が同様によく出た二首と言えるであろう。

定家の判詞に「左右、心姿同じさまの事に侍るべし」と言うのも、その点についての批評と思われる。なお、俊成は「……がほに」という表現を好ましくないと考えたらしいことが、『御裳濯河歌合』十一番判詞などから知られるが、定家はここで左歌の「うれしがほに」に対して、その点に別に触れていない。

【備考】二十一番左歌は『風雅集』（二六八）に収められている。

二十二番 左勝

四三時鳥たにのまにまにおとづれてさびしかりける嶺^{たけ}つづきかな

右

四四人きかぬふかき山路^{やまの}の郭公^{（大成）}なくねもいかにさびしかるらん

左歌、おもかげありて優にこそ侍るめれ。右歌も、鳴く音もいかになどいへる、誠にさびては聞ゆれど、左の、谷のまにまに、猶ふかく思入^{おもひいれ}りたるところ侍れば、勝と申すべし。

【通釈】

二十二番 左勝

四三時鳥^{はしとけ}が、谷間^{やま}ごとに声を響かせていって、寂しく思われた、連なる

峰々よ。

右

四四人の聞くことのない、深い山の中の郭公^{はしとけ}の鳴く声は、どんなに寂し

いことであろう。

左の歌は、情景がほのかに思い浮かべられて、優れた作のように思えます。右の歌も、「鳴く音もいかに（寂しかるらん）」などと詠んでいるのは、まことにさびた様子には思われるけれど、左の歌で、「谷のまにまに（おとづれて）」と詠んでいるのは、より深く思い入れたところが見えますので、（左の）勝と判定しましょう。

【注】〇おもかげありて優に 「おもかげ」は、歌論用語としては、眼前にはのかに浮かぶイメージを言う。主に風物詠に対する評語として、風物のイメージが思い浮かべられるような表現効果を認めた場合に用いられた。俊成が愛用した評語で、定家もこれを継承してかなり多く用いている。「優」は優美を中心の意味として、広い範囲にわたる賛辞として用いられた。「おもかげありて優に」と続けた先例は、『別雷社歌合』霞二十五番右歌「しなのぢやみさかをのほる旅人は霞をこゆる心ちこそすれ」に対する俊成の判詞に見える。〇さびて 歌合判詞に見える評語「さび」の用例は、俊成のものが最も古いが、すべて動詞の連用形で、一首の「姿」に対して評したものが全用例のほぼ半数に及んでいる。岡崎義恵氏は、「俊成のこの『さびたる姿』とは歌詞がやや古風で落着きがあり、静かな深い感じを与へるやうな場合に言つてゐるやうである」（『わび』と『さび』——『美の伝統』所収）と言われた。『宮河歌合』での定家の「さび」の用例は、この二十二番判詞の外に二十七番判詞に見えるが、その範囲では俊成の用い方と特に異なる点はなさそうである。

【考察】二十二番の二首は、時鳥の歌である。

二首はいずれもこれ以前の歌集に見えない。

左の歌は、時鳥が「谷のまにまににおとづれて」と詠んでいるが、峰々が続いて谷も多いところを時鳥が飛び過ぎながら、静かな谷々に声を響かせている、——そういう実地に即した歌であろう。その時の感想が「さびしかりける」で、これは本によって「あはれなりつる」「あは

れに見ゆる」等々の形でも伝えられるが、いずれにしても森閑とした山奥で時鳥の声を聞いて胸をうたれたことを詠み、その情景がおのずと浮かんでくるような特長がある。定家の判詞に「おもかげありて」と記すのも、その特長をとらえたものであろう。

右の歌も、深山の時鳥の声をとり上げている点は左歌と同様で、素直な歌い方も等しいけれども、これは「鳴く音もいかにさびしかるらん」と思いやっただけに終わっているとも見られる。

定家の判詞は、左歌の特徴を「おもかげありて」、右歌の特徴を「さびて」と、いずれも俊成の愛用した評語でとらえた上で、左の歌が一段と「ふかく思入りたる」ところが認められるとして左の勝とする。妥当な批評であろう。

二十三番 左持

四五しのおふるあたりもすすし川社榊にかかる波のしらゆふ

右

四六楸生ひてすずめとなれる陰なれや波うつ岸に風わたりつつ

左右の波のけしき、納涼の心、又ことにわくべき所待らぬにや。

【通釈】

二十三番 左持

四五篠の生い茂るあたりは涼しい、——川社の榊にかかる白木綿のような白波よ。

右

四六楸が生い茂って、涼しそうになった木陰よ、——波の打ち寄せる川岸に、風が吹きわたって。

左右の歌は、詠まれた波の様子も、納涼の心も、とりたてて優劣を区別しうるところはないように思います。

【注】〇しのおふる 篠が生い茂っている。「しの」は、幹が細く、群がって生える竹。『平安朝歌合大成』に挙げる本文や『西行上人集』では「しのおふる」（「しのにをる」）とあり、これは後の「川社」との関

係から、紀貫之の歌「川社しのにをりはへす衣いかにほせばか七日ひざらん」（『貫之集』四一五、「夏ばらへ」）による形であろう。○川社 六月の夏越の祓の時などに川辺で神楽を奏して神を祭ったこと、またその仮の社を言った語らしい。中古後期、中世初頭には語義が明らかでなくなっていたようで、歌学で種々の説が出されている。○榊 さかき。常緑樹で、神木として枝葉を神に供えるのに用いられた。○波のしらゆふ 「しらゆふ」は白い「木綿」。「木綿」はコウゾの皮の繊維で作った緒または布で、神を祭る時に榊などに掛けて用いた。「波の白木綿」は、榊に掛かる白木綿のように掛かる波の意であろう。これに対して「川波のたてる白波のように白木綿が榊にかかっている」（渡部保氏『西行山家集全注解』）と、白木綿を主とした解釈もある。ただ「波の白木綿」の語は、「いくかへり浪のしらゆふ」かけつらん神さびにけるすみのえの松」（『久安百首』八八二、俊成）のように、波を主として言うのが一般だったのでないか。○楸 ひさぎ。キササゲまたはアカメガシワで、いずれも落葉高木。『万葉集』の山部赤人の歌（九三〇）に「ひさぎ生ふる」と詠まれた影響で、中古の歌にもその形で詠まれることが多い。○すずめ 涼しそうな様子。他に用例を見いだしにくい語であるが、「細め」などと同様、形容詞の語幹に接尾語「め」のついた形であろう。○なれや ここでは詠嘆の意を表す。

【考察】二十三番の二首の共通点は納涼で、波立つ川の岸の様子を詠んでいる。

二首のうち左の歌は、『西行上人集』（七五〇）に、初句「しのにおる」の形で見える。右の歌は、『山家集』（二〇二〇）の「題しらず」の歌群の中と、『西行上人集』（五九〇）の「述懐の心を」の題詞をもつ歌群の中に見える外、『山家心中集』（一一一）にも見える。なお左右の歌とも『夫木和歌抄』に収められているが、その場合の題は左歌（三二八三）が「夏神楽」、右歌（三六四二）が「納涼」となっている。

左右の歌は、共に夏の川辺の、篠なり楸なりが涼しい陰を作り、川波が打ち寄せる情景を、サラリと詠んだという印象があると思う。小

品ながら佳作と言うべきであろうか。

定家の判詞も淡泊で、二首に詠まれた波の様子や納涼の心が同様であるだけ言い、持と判定している。「川社」という難義の語や「すずめ」という希少語など、俊成ならば『御裳濯河歌合』の判詞から推すと言ありそうにも思われるが、定家は触れるところがない。ちなみに「川社」については、俊成は後の『六百番歌合』での顕昭との応酬を経て『古来風体抄』(上)に自説を述べているが、定家は『僻案抄』付載の「かはやしる」に、俊成からの聞き書きを次のように記している。

密々に被「申含」しは、河社、河のいせにおちたぎつおとたくく、しらなみなぎりて、つづみなどのやうにきこゆる所を、河社といふ也。

二十四番 左持

四七霜うづむ葎がしたの蟋蟀あるかなさかのこゑ聞ゆなり

右

四八小倉山ふもとの里に木の葉ちれば梢にはるる月をみるかな

両首歌、左、暮秋霜底、聞「暗螢残声」、右、寒夜月前、望「黄葉落色」。意趣各宜、歌品是同。仍為レ持。

【通釈】

二十四番 左持

四七一面に霜の置く葎、その下にいるこおろぎの、あるかなさかの、かすかな声が聞こえている。

右

四八小倉山は(小暗いという名をもつが)、ふもとの里まで木の葉が散ると、こずえに明るく晴れた月が仰がれる。

二首の歌を見ると、左の歌は、秋の末の霜の置く下に、暗がりで鳴くこおろぎの声を聞くことを詠み、右の歌は、寒い夜の月の前に、もみじの散る様子を眺めることを詠んでいる。歌の心がそれ

ぞれ面白く、歌の品等は同等と思われる。そこで持と判定する。

【注】○葎 むぐら。カナムグラ、ヤエムグラなど、生い茂って草むらを作る草。○小倉山 をぐらやま。今の京都市右京区嵯峨にある山。「小暗し」の意を掛けて歌に詠まれることが多く、この場合もそう見るべきであろう。○暮秋 秋の末 ○暗螢 暗い所で鳴くこおろぎ。

【考察】二十四番は、左が「霜」の下「きりぎりす」の歌、右が落葉した梢に見る「月」の歌で、共に冬の季節に属する。

二首のうち左の歌は、『山家集』上冬(四九三)に、「十月はじめてかた、やまざとにまかりたりけるに、きりぎりすのこゑのわづかにしければよめる」の詞書で見える。『西行上人集』冬(二七九)にも見え、詞書も大体は同様であるが「きりぎりす」でなく「すずむし」となっている。(歌では「きりぎりす」)『山家心中集』(二六〇)にも大体同様の詞書で見える。(これは詞書でも「きりぎりす」)右の歌は、『西行上人集』冬(二九二)に、「冬月」の題の五首の中の一首として見える。『新古今集』冬の部(六〇三)には「題しらず」として収められている。左の歌は、初冬のころ、こおろぎのかすかな声を聞きつけた時の様子を、そのまま歌って哀れさを伝えている。

右の歌は、小倉山ふもとの里に木の葉が散ると、こずえに晴れた月が仰がれる、その季節の進行に伴う風景をとらえている。「小倉山」が「小暗し」を意識して歌に詠まれたことは、

大井河うかべる舟のかがり火にをぐらの山も名のみなりけり(『後撰集』一二三二、業平)

などが示しているとおりで、この場合もその意識があつて、それと対照的に「はるる月」をとらえているのであろう。なお、小倉山はもみじの名所であるから、散る「木の葉」をもみじと見ると、視覚的な美しさが一層加わることになる。

定家の判詞では、左歌を「暮秋」の歌としているが、『山家集』の詞書などによると初冬の歌である。左右とも過ぎた秋をしのばせる初冬の情景を詠んだ作で、定家は持と判定している。

【備考】二十四番右歌は『新古今集』（六〇三）に収められている。

二十五番 左

四九よし野山ふもとにふらぬ雪ならば花かとみてや尋ねいらまし

右勝

五〇風さえてよすればやがて氷りつつかへる波なきしがのからさき

左も、うるはしきさまよろしく侍れど、帰る浪なきなどいへる
は、花にまがふ吉野の雪よりは、深くや聞え侍らん。仍以レ右為レ
勝。

【通釈】

二十五番 左

四九吉野山の、ふもとには降らず、奥の峰に降った雪だったなら、（遠目に）花かと見て、山奥へ尋ね入りもしただろうか。

右勝

五〇風が冷えきつて、波は寄せるままに次々に凍り、返る波はないと見える、志賀の唐崎よ。

左の歌も、整った歌の姿で結構に思いますが、（右の歌に）「かへる波なき」などと詠んでいるのは、（左の）花と見まがう吉野の雪の歌よりも、思い入れの深いものと見られるであろうかと思えます。そこで右の勝とします。

【注】〇しがのからさき 志賀の唐崎。今の滋賀県大津市内、琵琶湖西岸の地名。近江の国の歌枕で、氷や月などと共に歌に詠まれることが多い。

【考察】二十五番は、左が「吉野山」の「雪」の歌、右が「志賀の唐崎」の「氷」の歌で、共に名所の冬の風物を詠んだ作である。

『山家集』には、左歌（五六五）右歌（五六四）共に「冬歌十首」と題して見える。『西行上人集』には、左歌（三〇八）右歌（三〇六）共に「冬の歌どもよみ侍りしに」の詞書で見える。『山家心中集』にも、左歌（二七五）右歌（二七四）共に「冬の歌あまたよみ侍とて」の詞

書で見える。

左の歌は、吉野山の奥の峰だけに降った雪だったなら、その雪を「花かと見て」山奥へ尋ね入ったことだろうかと思われ。雪を花と見る趣向の歌は、花を雪と見る趣向の歌とともに、その例が多い。ただ吉野山に関しては、

み吉野の山べにさけるさくら花雪かとのみぞあやまたれける（『古今集』六〇、友則）

のように、花を雪と見る趣向の歌はあっても、雪を花と見る趣向の歌は、西行以前には見いだしにくい。その点では、吉野山の花を雪のうちから待ちわびて、

吉野山桜がえだに雪ちりて花おそげなる年にもあるかな（『西行上人集』三八）

とも詠んだ西行の特色の出た作と言えるかと思われる。もともと、「吉野山ふもとにふらぬ雪ならば」と仮定した一首は、「吉野山桜がえだに雪ちりて」と属目の風景を率直に詠んだ歌に比べると、人の共感を呼ぶ力は弱いかもしれない。

右の歌は、志賀の唐崎に寄せる波がそのまま凍り、返る波がないと詠む。さえわたる湖岸の波の様子を強調してとらえた作である。志賀の湖岸に寄せる波が凍っていくという発想の歌の先例としては、

さ夜ふくるままにみぎはやこほるらん遠ざかりゆく志賀の浦波（『後拾遺集』四一九、快寛）

があるが、それは夜更けの様子を聴覚を主としてとらえているのに対して、これは必ずしもそうではないので、「一応趣を異にする作である。

定家の判詞は、左歌の詠み方も「うるはしきさま」で「よろし」とするが、右歌の方が「深く聞え」として右の勝とする。これは右歌で、波が「よすればやがて氷」とか、「返る波なき」とか、常識を超えたとらえ方をした、さえかえる湖岸への作者の思い入れの深さを高く評価したのであろうか。『平安朝歌合大成』の本文によれば、左歌が詠み古された趣向であることが右の勝の根拠とされる。

【備考】二十五番右歌は『新勅撰集』（四〇〇）に収められている。

二十六番 左持

五一おしなべて物をおもはぬ人にさへ心をつくる秋のはつかぜ

右

五二誰すみて哀しむ山里の雨ふりすさむ夕ぐれ（左の秋の風、右の暮雨、心かれこれにみだれて、又わきがたく侍れば、持とや申すべからん。）の空

左の秋の風、右の暮雨、心かれこれにみだれて、又わきがたく侍れば、持とや申すべからん。

【通釈】

二十六番 左持

五二すべて一様に、物思いをしない人にまで、もの思う心を起こさせる秋の初風よ。

右

五三だれが（あの山里に）住んで、哀れ深い趣を味わっているのだろうか、——山里に雨の降りしきる夕暮れの空よ。

左の秋の風の歌と、右の夕べの雨の歌と、いずれがより優れているかに迷って、結局これも優劣を区別しにくいと思われまうので、持と言う外はないでしょうか。

【注】○おしなべて すべて一様に。○心をつくる ここでは、ものを感じる心を起こさせる意。○ふりすさむ 降りしきる、盛んに降る、の意として「通釈」には解しておいたが、小降りになる、やみかける、の意とする見解が久保田淳氏『新古今和歌集全評釈』（第七巻）に見られる。久保田氏は連歌学書『分葉』の「すさむ」の項でこの「雨ふりすさむ」の歌について「降りやむ」意とするのを挙げ、また『新古今集』の「思ひかねうちぬるよひもありなまし吹きだにすさめ庭の松風」（一三〇四、良経）を参考に引かれる。一体、動詞の連用形の後に続けた「すさむ」（「すさぶ」）には、程度がはなはだしくなる意味の場合も、勢いが衰える意味の場合もあることは、従来知られている。その点では久保田氏の見解は後者の意に解されたことになるが、前者の意と見ら

れる用例に『拾遺愚草』の「しがらきのと山のあられふりすさびあれ行く比の雲の色かな」（二四一七）もあり、『新日本古典文学大系 新古今和歌集』では顯昭『散木集注』に「咲きすさみたるとは盛りに咲くといふ心なり」とあるのを挙げて前者の意に解する。

【考察】二十六番は、左が「秋の初風」の歌、右が「夕暮れ」の「雨」の歌である。右の歌は季節を示す言葉はないが、『西行上人集』で秋の部に収められている。

二首ともに『西行上人集』の秋の部に見え、左の歌（一六七）は「はじめの秋の比、なるをと申す所にて、松風の音を聞きて」の詞書をもつ歌の次にあり、右の歌（二七一）は「雜秋」三首の第一首である。また二首は『新古今集』にも収められているが、左歌（二九九）は秋歌上に、右歌（一六四二）は雑歌中に見え、いずれも「題しらず」となっている。

左の歌は、「秋の初風」に焦点を置いて、それが物思いをしない人にまで物思う心を起こさせると歌う。一般的なとらえ方とも見えるが、作者自身が「秋の初風」に心を深く動かされていることを言外に前提とした歌である。窪田空穂氏が「自身の堪へられないさみしさを、余情として漂はすことによつて、自身の感を生かしてゐる」（『新古今和歌集評釈』）と言われるのは、そのあたりの事情に触れたものかと思う。

右の歌は、雨の夕暮れの山里に「誰すみて哀しむらむ」と歌っている。その解釈に関して『新古今増抄』は「山ざとをみやりてといふ説と、わが山ざとに住みて、われこそはしれ、住む人もなければ又は誰かしるといふと、両説なり」と言う。その両説の内、後者のように作者が山里に住んで哀れを知るとの作意とする説は近代にも見られるが、諸家の指摘されるとおりやや無理な解釈と思われる、やはり前者のように属目の風景について思いを述べた作と解すべきであろう。すなわち、雨の夕暮れの山里を見て、あそこのだれが住んで哀れ深い趣を味わっていることかと思ひやり、その人を懐かしんだ作であろう。

なお、「誰すみて哀しむらむ」の句は、『雲葉和歌集』や『夫木和歌

抄』に源道済の作として収める次の歌に見られる。

たれすみてあはれしるらんとときは山おくの岩屋のありあけの月

『雲葉和歌集』六一五、『夫木和歌抄』八二二九

この歌は『夫木和歌抄』には「家集、雑歌中」として出ているが、現存の『道済集』には見えない。

定家の判詞は、「左の秋風、右の暮雨」それぞれ心ひかれる作と見たようで、持とする。

【備考】二十六番の左右の歌は、共に『新古今集』（二九九、一六四二）に収められている。

二十七番 左

五三わが心さこそみやこにうとくならめ里のあまりにながゐりてけり

右勝

五四程ふればおなじ宮このうちだにもおほつかなさとはまほしきを

左歌も、すがたにさびて、いとあはれに聞え侍るを、右、猶とどこほる所なくいひながされて侍れば、勝とや申すべからん。

【通釈】

二十七番 左

五三わたしの心は、さぞかし都と縁遠いものになることであろう、――

田舎暮らしが余りに長くなってしまった。

右勝

五四（会わずに）月日がたつと、同じ都の内にてさえ、気懸かりで安否を尋ねなくなるのに。（まして遠く離れたら、どんなに気になることだろう。）

左の歌も、その姿がさびた様子で、まことにあわれと思われすが、右の歌は、一層よどみなく詠みながされていますので、（右が）勝ると判定すべきかと思えます。

【注】○さこそ さぞかし。○里 ここでは「都」に対して田舎を言う。○宮 都。○さびて 二十二番「注」参照。

【考察】二十七番の二首は、都を離れることに関する思いを詠んでいる。旅の歌とも言える。

二首のうち左の歌は、これ以前の歌集に見えない。右の歌は、『山家集』雑（一〇九二）に、「とほく修行に思ひたち侍りけるに、遠行の別と云ふ事を、人人まできてよみ侍りしに」の詞書で見える。『西行上人集』雑（四四四）には「旅のこころを」として見える。なお『続後撰集』羈旅歌（二二九三）には、「遠行別といふことを」として収められている。

左の歌は、田舎の暮らしが長くなって、自分の心は都と縁遠くなるばかりだという感慨を、端的に詠んでいる。西行は離れた都を懐かしみ、「都にうとく」なる身を省みる思いを時々もつたようで、それは、なれきにし都もうとくなりててかなしさそふる秋のくれかな（『山家集』一〇四五、『山家心中集』三二三、『西行上人集』四九五では第五句「秋の山里」）

都うとくなりけりとも見ゆるかなむぐらしげれるみちのけしきに（『聞書集』九六）

などと歌われているが、この左歌もそういう思いを最も素朴な形で詠んでいると思う。これ以前の歌集に見えないから西行晩年の作であろうか。

右の歌は、『山家集』の詞書によれば、「遠行の別」という題詠、ただし実際に遠く旅立とうとしていた西行の状況に合わせた題で詠まれたもので、やはり作者の実感を伝える一首であろう。ただ一首は感慨を言い尽くすことをせず、「月日がたつと、同じ都の内にてさえ安否を気づかう心になるのに」と言いさして、後は含みとした表現に特色が見られる。

定家の判詞は、左歌に対しては「姿さびて、いとあはれに」思われと評する。「姿さびて」と言ったのは、左歌の言葉飾らない素朴な歌い方に古風な特徴を認めた評であろうか。『万葉集』のあまざかるひなにいつとせ住まひつつ都のてぶり忘れにけり

(八八四)

などが想起されているのかもしれない。

しかし定家は、その左歌に比べて右歌を「とどこほる所なく言ひ流されて」いる点から勝と判定する。確かに右歌が句切れなく一息に詠み下されているのに比べて、左歌は三句切れであり、「うとくならめ」の本文によれば字余りでもある。ただその上で推測すれば、左歌の詠み方は素朴に過ぎ、右歌の含みのある表現に及ばないとも定家は見たのではないかと思う。

【備考】二十七番右歌は『続後撰集』(一一九三)に収められている。

二十八番 左勝

五五時雨かは山めぐりする心かないつまでとのみうちしをれつつ

右

五六わがやどは山のあなたにあるものを何と憂世をしらぬ心ぞ

時雨かはとおけるより、いつまでとのみうちしをれつつ、といひはてたるすゑの句も、なほ左やまさり侍らん。

【通釈】

二十八番 左勝

五五時雨でもないのに、時雨が山から山へ移って降るように、移り続けるわたしの心よ、——いつまでこんな風に過すことかと、愁いに閉ざされながら。

右

五六わたしの住むべき所は、山のかなたの西方浄土にあるのに、どうしてこの世が憂き世であることを悟らないわが心なのか。

(歌の初句を)「時雨かは」と置いたところから、「いつまでとのみうちしをれつつ」と詠み終わった下の句まで、やはり左の歌の方が勝つていようかと思えます。

【注】○時雨かは 「かは」は反語を示すと見て、時雨ではないのに、の意と解したい。『山家集』陽明文庫本は「しぐるれば」の形であるが、

この歌合では定家の判詞にも「時雨かは」として引用されているので、このままの形で見なければなるまい。○山めぐりする心 「山めぐり」は、山々を巡ることであるが、この場合初句「時雨かは」などと併せて見ると、一首は『詞花集』(一四九)等に見える「もろともに山めぐりする時雨かなふるにかひなき身とはしらずや」によって詠まれたと思われる点も考慮して、時雨が山から山へ移って降るように移り続けるわが心、の意と解したい。○いつまで この場合、時雨について、いつまで降ることかを示すとともに、自身について、いつまでこういう心の状態で経ることかを示したものであろう。○山のかなた山のかなたの西方浄土を、ここでは指す。『山家集』に「いり日さす山のあなたはしらねども心をかねておくりおきつる」(九四二)の一首が見える。

【考察】二十八番の二首は、述懐の歌である。なお述懐の歌の組み合わせが、この後しばらく続く。

二首ともに『山家集』雑の部に見え、左歌(一〇三二)は(陽明文庫本では初句「しぐるれば」の形で)「題しらず」の歌群の中に出ており、右歌(七一六)は題詞等はなく出ている。また左歌は『西行上人集』(五三六)には「述懐の心を」の詞書で見える。

左の歌は、日本古典文学大系『山家集』では、陽明文庫本の初句「しぐるれば」の形によって、次のような大意とされる。

時雨が降ると、山々の寺などをめぐり歩くときの心地がする。いつまでしぐるることかと、打ちしおれながら。

新潮日本古典集成『山家集』も、同じ本文により、ほぼ同様の現代語訳を示した上で、歌の初句が「時雨かは」の場合は「時雨であらうか、いや時雨ではないが、の意となる」とされるが、その場合の第二句以下の解釈は示されていない。

一首はこの歌合の場合、初句が「時雨かは」であることは、定家の判詞にその形で引用されている点からも明らかなので、それによって解釈しなければなるまい。そして、そういう解釈として管見に入るも

のに、日本古典全書『歌合集』注の峯岸義秋氏の次のような解釈がある。

わたしの心はなぜにこれほど憂き世を捨て難く逡巡してゐるのであらう。時雨でもないのに、まるで時雨が山めぐりするやうに、思ひ立っては止み、いつまでかうして生きられると思つて、うちしをれながらも俗世を捨て難くしてゐるのであらう。

これは具体的に書かれているだけに、部分的には問題があるかもしれないが、大筋としては妥当な解釈であらうと思う。「通釈」に記した私解も、基本的には同様の見方によつてゐる。

いずれにしても、一首は「注」に引いたが『詞花集』などに見える次の歌によつて詠まれていると思う。

もろともに山めぐりする時雨かなふるにかひなき身とはしらずや
〔詞花集〕一四九、『金葉集』三奏本二六三、『玄々集』一五三では五句「世とはしらずや」

（この歌の作者は各歌集共通して道雅としているが、『袋草紙』の撰集の故実の項には本来一首の歌ではなく連歌であると言い、『俊頼髓脳』には連歌として挙げて、前句の作者を道雅、付句の作者を兼綱としている。）その「山めぐりする時雨かな」を背景として、西行は自身の心に焦点をおいて「山めぐりする心かな」と詠み、動揺して先の見えな

い閉ざされた心の様子を示しているのではないか。
右の歌は、その用語から、『古今集』に見える次の歌によつて詠まれたものと思われる。

み吉野の山のあなたにやどもがな世のうき時のかくれがにせむ
（九五〇、よみ人しらず）

しかし「山のあなた」は、西行にとつては憂き世を離れた仙郷とは違つて、西方浄土を意味したことは、『山家集』の次の歌などから知られる。

いり日さす山のあなたはしらねども心かねておくりおきつる
（九四二）

それで右の歌は、西方浄土への往生を願いながら、なおこの世にひか

れる自らの心を省みた作であらう。

左右とも自身の心を省みた述懐の歌であるが、定家の判詞では左歌の初句及び下句を引いて勝ると判定する。左歌が右歌ほど論理的な筋が明らかでないだけに、含蓄のある表現としてより高く評価したのではなからうか。

二十九番 左

五七年月をいかで我が身におくりけむ昨日見し人けふはなき世に

右勝

五八昔思ふ庭にうき木を積みおきてみし世にも似ぬ年の暮かな

昨日見し人けふはなき世、実にさることときこえて、いと哀に侍るを、庭にうき木をつみおきてとおける、さだめて思ふところありけん」とみえ侍るうへに、見し世にもにぬとしのくれかなといへるも、猶優に侍れば、勝とや申すべからん。

【通釈】

二十九番 左

五七この年月を、どのようにして、わたしは送ってきたことだろう、——昨日会った人が今日は亡くなっている世に。

右勝

五八昔を思つて、庭に浮き木を積んでおくにつけても、かつて過ごした

（在俗のころの）暮らしとは随分違う年の暮れだと思ふ。

（左の歌に）「昨日見し人今日はなき世」と詠んだのは、まことにもつともなことと思われて、大層心をうたれますが、（右の歌に）

「庭にうき木を積みおきて」と言つたのは、必ずや作者の心中に特に思うところがあつたのであらうと推測されます上に、「見し世にも似ぬ年の暮かな」と詠んでいるのも、やはり優しいことと見られますので、（右の）勝と言うべきであらうかと思ひます。

【注】○いかで、ここでは、どのようにして、という疑問の意。○我が身に わたし自身について。○昨日見し人 昨日会った人。『平安朝歌

合大成』では「きのふの人」の形で、『西行上人集』『新古今集』等もその形である。○うき木を積みおきて 「うき木」は、水上に浮かぶ木で、ここは流れてきた木片を、新春を迎える用意の薪（年木）として積んでおくことを言ったものか。また「浮き木」については、『涅槃經』などの仏典に、大海中の盲亀が海上の浮き木の穴に出会う類の例えて仏法に会うのが難しいことを言っており、それと結びつける説がある。なお、北岡文庫藏幽斎書写本、静嘉堂文庫本、群書類従本等は「たき木」の本文であるが、『西行上人集』、『聞書集』、『新古今集』等でも「うき木」の形が一般的である。

【考察】二十九番の二首も、述懐の歌である。そしてこの二首は、特に過去にさかのぼって自己を省みた述懐という共通性がある。

二首のうち左の歌は、『山家集』雑（七六八）に「題しらず」とされる歌群の中に出ており、『西行上人集』雑（三九九）には「無常の心を」の詞書をもつ歌群の中に見える。『新古今集』雑（二七五〇）では「題しらず」の歌の中に出ている。右の歌は、『西行上人集』冬（三二三）に「歳暮」、『聞書集』（一〇〇）に「古郷歳暮」として見える。『新古今集』冬（六九七）では「題しらず」の歌として収められている。

左の歌は、『山家集』で「題しらず」の歌群（七五六―七六八）の終わりに見えるが、この歌群の歌はすべて無常に関する内容で、その点『西行上人集』の「無常の心を」の詞書をもつ歌群の歌と異なるところはない。「昨日見し人けふはなき」無常迅速の世と知る立場から、自己のこれまでの生き様を省みて、どんなに無意味な歳月を重ねてきたことかと嘆いた作であろう。

右の歌は、出家の身で歳暮を迎えて、在俗当時の昔をしのび、庭に形ばかりの薪を年木として積んでおくにつけ、昔と比べて今の自分の暮らしぶりは変わったものと感慨を覚えたという作意と推察される。

定家の判詞は、左の「昨日見し人けふはなき世」と無常の世をとらえた歌を、「実にさること」と言い、「いと哀」と評しているが、判定では右を勝としている。右歌の特長として定家の挙げている点を見る

と、一つには「庭にうき木を積みおきて」と詠んだのを「さだめて思ふところありけんと思え」と言っている。これはそこから想像される余地のある表現として評価したのであろうか。また一つには「見し世にも似ぬ年の暮かな」と詠んだのも「優」であると評している。これは昔とは随分違った形で歳暮を迎えたことだけを言って、嘆く心などを見せていない点を評価したのであろうか。

なお、『新古今集』では、撰者名注記のある本によると、定家は左右の歌を共に撰んでいるから、少なくとも『新古今集』撰歌の当時は、定家は左歌に右歌とさして変わらない価値を認めていたと考えられる。

【備考】二十九番の左右の歌は、共に『新古今集』（二七五〇、六九七）に収められている。

三十番 左持

五九またれつる入あひのかねの音すなりあすもやあらばきかむとすらん

右

六〇何事にとまる心のありければさらにしも又世のいとはしき

左の、鐘のこゑに心つきはてて勝と申すべきを、右の、さらにしも又といへる、負くべき歌の詞とはみえ侍らねば、勝劣わきが

たぐや。

【通釈】

三十番 左持

五九心待ちにしていた、入相の鐘の音が聞こえる。明日も生きていれば、

また聞くことであろうか。

右

六〇一体何事に執着する心があつたために、出家した身に、さらにまた、この世がいとわしく思われるのだろうか。

左の、鐘の音についての歌に、全く心を奪われて（左の）勝と申すべきところですが、右の、「さらにしも又（世のいとはしき）」と詠んでいるのは、負になるような歌詞とは思われませんので、

勝負はつけにくいかと考えます。

【注】○入あひのかね 入相の鐘。日没を告げる寺の鐘。○とまる心 執着する心。○さらにしも又世のいとはしき ここでは、世をいって出家しているのに、さらにまた世がいとわしく思われる意。○心つきはてて 心をすっかり奪われてしまつて。

【考察】三十番の二首も、述懐の歌である。そして二首は、特に仏門にある自己の心を、それぞれ方面は違うが詠じたところがある。

二首ともに『山家集』『西行上人集』『山家心中集』に見え、『新古今集』にも収められている。『山家集』雑では、左歌（九三九）は「題しらず」の歌群の中に、右歌（七二九）は「述懐」と題して出ている。『西行上人集』雑では、左歌（五七三）は「述懐の心を」と記した歌群の中に、右歌（四九四）は「素覚がもとにて、俊恵と罷合ひて、述懐し侍りしに」の詞書で出ている。『山家心中集』雑では、左歌（一二五）は題詞のない歌群の中に、右歌（三二二）は、「素覚が許にて、俊恵などまかりあひて、懷述べ侍しに」の詞書で出ている。『新古今集』雑では、左歌（一八〇八）右歌（一八三一）ともに「題しらず」の歌群の中に収められている。

左の歌は、入相の鐘の音を聞いての思いを詠んでいる。上句に「待たれつる入相の鐘の音すなり」とあるが、どんな意味で「待たれ」るのかという点について、宣長は『美濃の家づと』に次のように言っている。

表は入相の鐘をまてるにて、裏に死ぬることを待意をかねたり。

近代の解釈でも、例えば窪田空穂氏『新古今和歌集評釈』では、「仏者としての死を待つて、その時と思つてゐた入相の鐘の聞えて来た時の心である」とされる。そのように見てよいのであろう。そして下句に「明日もやあらば聞かんとすらん」、明日も生きていたら聞くことになろうか、と淡々と歌っている。これを、『詞花集』で「入相のかねのこゑをききてよめる」の詞書をもつ和泉式部の歌、

夕暮はものぞかなしきかねのおとをあすもきくべき身とししらね

ば（三五七、『和泉式部集』三五五）

と比べてみると、題材は同様であるが、自己の無常の運命を和泉式部は悲しみ詠嘆しているのに対して、西行はすべて仏に任せる態度をとっている特色が明らかである。

右の歌は、世を捨てた出家の身であることを前提にして、出家の身であらためて世をいとわしく感じたのは、この世の何事に執着する心が残っていたためかと、自己を省みた心を詠んだ作である。これはまた、そういう特別な場合の心を詠んだ点で特色のある作であろう。定家の判詞も、そのような左右の歌それぞれの特色を認めているかと思われ、持と判定している。

【備考】三十番の左右の歌は、共に『新古今集』（一八〇八、一八三一）に収められている。

三十一番 左勝

六二なき人をかぞふる秋のよもすがらしをる袖やとりべの露

右

六二はかなしやあだに命の露きえて野べにや誰も送りおかれん

おくりおかれむ野べの哀も、あさくみなさるるには侍らねど、左の下句、猶ながき夜の袖の露もふかくおきまさる心ちして侍るにや。仍為レ勝。

【通釈】

三十一番 左勝

六二亡くなった人を思い、その人々を数える秋の夜を通して、袖がぬれるのは、鳥辺野に置く露のせいであろうか。

右

六二はかないことだ、——むなしく命は露と消えて、だれも皆（なきがらを）野べに送って置かれる身になるのだろうか。

（右の歌に詠まれた）なきがらを送って置かれる野べの哀れさも、軽く考えられるわけではありませんが、左の歌の下句は、やは

り長い秋の夜に袖に露がひとしお深く置くように、哀れさが一層深く、優れて詠まれているかと思われます。それで（左の）勝とします。

【注】○とりべの 鳥辺野（鳥部野）。今の京都市東山区の阿弥陀ヶ峰が鳥辺山で、その山すそが鳥辺野であるという（『新日本古典文学大系 中世和歌集鎌倉篇』）。平安時代から火葬場、墓地として知られる。○命の露 露のような（はかない）命。なお、この場合「露」は「野べ」の縁語。

【考察】三十一番の二首も、述懐の歌であるが、内容から言えば無常を嘆く心が目立つ歌である。

二首のうち左の歌は、『西行上人集』雑（三九三）に、「無常の心を」の詞書をもつ歌群の中に見える。右の歌は、『山家集』雑（七六四）に、下句「野べに我が身やおくりおくらん」の形で、「題しらず」の歌群の中に見える。『新続古今集』哀傷歌（一五八〇）では、『宮河歌合』と同じ歌形で、「無常の心を」の詞書のかかる歌群の中に収められている。左の歌は、秋の夜長に、亡き人々を思い出して涙で袖をぬらす様子を詠んでいるのであろうが、涙と言わず鳥辺野の露として表現している。

右の歌は、「はかなしや」と詠嘆して、人の命が露のようにむなく消え、野べに送られる身となることをとり上げている。これは率直に詠まれた歌であるが、とり上げられたことは一般的なことであり、初めに「はかなしや」と嘆く心を表に出したために、左歌に比べて底が浅くなったと見られないでもない。定家の判詞も、そういう点を念頭に置いて左の勝と判定したものかと思う。

【備考】三十一番右歌は『新続古今集』（一五八〇）に収められている。

三十二番 左

六三 道かはるみゆきかなしき今夜（よる）かなかぎりのたびとみるにつけても

右

六四 松山の波にながれてこし舟のやがてむなく成りにけるかな

左右共に為「旧日重事」。故不_レ加_レ判。

【通釈】

三十二番 左

六三（死出の旅という）今までと道の変わった御幸が悲しい今夜です、——これがこの世の最後の御旅路と思うにつけても。

右

六四 松山の津に、波に運ばれて来た舟が、そのままむなく朽ちてしまった。（松山の地に流された院は、そのまま他界され、御所の跡形さえなくなってしまった。）

左右の歌は、共に過去の重大な事件とする（両院関係の）ことにかかわっている。そのため判を差し控える。

【注】○道かはるみゆき 鳥羽法皇葬送の折の作であることが『山家集』の詞書に示されていて、従来の御幸と道の異なるあの世への御幸の意で言ったと知られる。○かぎりのたび この世での最後の旅。死出の旅。○松山の波にながれてこし舟 崇徳上皇が讃岐の配流先で崩御された後、「松山の津」に院の配所の跡をたずねた折の作であることが、『山家集』の詞書等に示されていて、松山の地に遠流の身となった院を暗示した表現と知られる。「松山」は、今の香川県坂出市内。同市林田町の雲井御所跡が院の配所の跡と言う。なお「舟」は、後の「むなく成りにけるかな」と併せて見ると、上皇の異称の「むなしき舟」が意識されるか。『俊頼髓脳』には、『後拾遺集』一〇六二の後三条院の歌に詠まれた「むなしきふね」の語を「おりゐの帝を申すなり」と解説する。

【考察】三十二番の二首も、述懐の歌と言えるが、特に左は鳥羽法皇、右は崇徳上皇という、院の崩御についての、哀傷の歌である。

二首ともに『山家集』『西行上人集』に見える。『山家集』雑には、左歌（七八三）は鳥羽院葬送の折の三首の二首目に「をさめまゐらせける所へわたしまゐらせけるに」の詞書で出ている。右歌（一三五三）は

「さぬきにまうでて、まつやまのつと申す所に、院おはしましけん御あ
とたづねけれど、かたもなかりければ」の詞書をもつ二首の一首目に
出ている。『西行上人集』雑には、左歌（三九四）は「無常の心を」の
題詞をもつ七首の二首目に出ており、右歌（四五六）は『山家集』と
大同小異の詞書で出ている。なお『玉葉集』雑には、左歌（二三七三）
が「鳥羽院かくれさせ給て御わざの夜、むかしつかうまつりなれにし
事などまでおもひつづけてよみ侍りける」の詞書で収められている。

左の歌に詠まれた鳥羽院は、西行がかつて北面の武士として仕えた
方であり、その葬送の儀に西行は高野山から都に来ていて出会ったよ
うである。当時の西行の心情を、『山家集』でこの歌の前に置かれた一
首（七八二）とその詞書について見ると、次のとおりである。

一院かくれさせおはしまして、やがての御所へわたしまゐらせ
ける夜、高野よりいであひてまゐりあひたりける、いとかなし
かりけり。この、のちおはしますべき所御覧じはじめけるその
かみの御ともに、右大臣さねよし、大納言と申しける、候はれ
けり。しのばせおはしますことにて、又人さぶらはざりけり。
その御ともにさぶらひけることの思ひいでられて、をりしもこ
よひにまゐりあひたる、むかし今の事思ひつづけられてよみけ
る。

こよひこそ思ひしらるれあさからぬ君にちぎりのある身なりけり
鳥羽法皇の御遺体を安楽寿院本御塔に移した夜に、西行はかつて法皇
がここの工事完成の下検分に微行で来られた際に徳大寺実能さねよしの外に自
分も供をしたことを思い、今御葬送の折に参り合わせたにつけ、法皇
との浅からぬ縁を感じている。西行はそういう心で法皇の御他界を受
けとめ、左歌に「道かはるみゆきかなしき今夜かな」と詠んだもので、
哀悼の真情をこめた挽歌と見られる。

右の歌に詠まれた崇徳院は、鳥羽院の第一皇子であるが鳥羽院の院
政の下で不遇であったことから、鳥羽院崩御の年に保元の乱を引き起
こし（一一五六年）、讃岐に配流されて配所で崩御されている（一一六

四年）。この崇徳院に西行がある親近感をもっていたことは、崇徳院の
生母待賢門院璋子が徳大寺家の出身（実能の妹）であり、西行は若い
ころその徳大寺家に仕え、鳥羽院の北面の武士になったのもその縁に
よると推定されているような点から、当然のことであつたと思われる。
それで西行は、崇徳院が保元の乱の後出家して移られた仁和寺に行つ
て歌を詠み、院が讃岐に住まれてからも院の女房を通じて歌の贈答を
しているが、院の没後四国へ旅をして讃岐松山の配所の跡をたずねた
時の詠が、右歌である。松山に波に流されてきた舟がそのままむなし
く朽ちたと詠み、それに託して、院が松山に配流されたまま亡くなら
れ御所の跡形さえないことを詠嘆している。これは隠喩の形をとつて
詠んでいるが、『山家集』でこの歌の後に続く一首（一三五四）では、
院の運命に対する心情をより直接的に表現して、

松山の波のけしきはかはらじをかたなく君はなりましにけり
と詠んでいる。なお、その後に続く一首（一三五五）は、白峰の御墓
（白峰御陵）に参拝した際の歌であるが、

よしや君むかしの玉のゆかとてもかからん後は何にかはせん
というので、世の無常に触れた鎮魂の歌であるけれど、強い語調が目
立ち、院の運命に対する西行の一方ならぬ激しい思いが出ているよう
である。

定家の判詞は、左右共に「旧日の重事」に関する歌なので判を加え
ないと言っている。鳥羽院と崇徳院は、お二人の関係から保元の乱が
起こされたと見られる面があり、特に配所で崩じられた崇徳院の怨霊
に対しては宮廷関係者の甚だ恐れるところであつたと思われるから、そ
ういう点で定家は加判をはばかったものであろう。

【備考】三十二番左歌は『玉葉集』（二三七三）に収められている。

三十三番 左持

六五うき世とて月すまずなる事もあらばいかはすべき天の下人

右

六六ながらへて誰かはさらにすみとげむ月かくれにしうき世なりけり
左、月をおもへる余の心^{こころ}に侍るめり。右、生滅無常を知る詞の
つづき、又耳にたつ所侍らねば、持と申すべし。

【通釈】

三十三番 左持

六五憂き世というので、澄んだ月が見えなくなることがあれば、どうすればよいのか、——天下の人々よ。

右

六六生きながらえても、だれが一体（この世に）さらに住み続け、住み
おせられようか。澄んだ月の見失われた、憂き世ではある。

左の歌は、月をこの上なく思った結果こういう心を詠まれたので
しょう。右の歌は、生あるものは滅び不変のものはないという道
理を理解して詠まれており、特に耳障りな点もありませんから、
持と判定しましょう。

【注】○天の下人 天下の人々。『平安朝歌合大成』等は「あめのまし
ひと」の本文を挙げ、『聞書集』にもその形が見える。「天の益人」に
ついて『日本古典全書山家集』は「人民。殖え増してゆく人民、この
世の人といふほどの意」と注する。○月をおもへる余の心に侍るめり
「あまりの心」は、『和歌九品』で上品上や上品中の歌の説明に用いら
れている用例は余情の意であろうが、この左歌に即して見ると、その
意味とは考えにくい。一方『六百番歌合』の俊成の判詞の用例は、春
下十二番（題は志賀山越）の左歌「をちかたやまだ見ぬみねはかすみ
にて猶花おもふしがの山ごえ」（一四三）に対して、「霞にては、さま
で耳にたつべくやは。但、山越えのみちを花をばおきて、他峰の霞の
中をおもへる、あまりの心にや侍らん」と評した用例で、これは前後
の言葉も定家の判詞の場合に近いところがあるが、度を越えた趣向の
立て方を否定的に批判したものであろう。定家の左歌に対する批評を
これと同様に見て否定的に批判したと考えると、その後に右歌を肯定
的に評した上で左右の歌を持としているのと矛盾することになる。そ

れで定家は、左歌の誇大とも見える歌い方を弁護する立場で肯定的に
評したと見て、「通釈」のように解しておきたい。

【考察】三十三番の二首は、月に寄せた述懐の歌である。

二首のうち左の歌は、『西行上人集』雑（五三七）の「述懐の心を」
の詞書をもつ歌群の中に見え、『聞書集』（九二）には第五句「あめの
まし人」の形で「月前述懐」の題詞の下に出ている。右の歌は、これ
以前の歌集に見えない。

左右の歌は、ともに「うき世」に関して「月」をとり上げ、「月すま
ずなる事もあらば」とか「月かくれにし」とか詠んでいる。こういう
「月」は仏者西行にとつて、憂き世の迷いを離れた理想の境地の象徴で
もあつたと思われる。この点は例えば、

やみはれて心のそらにすみ月は西の山べやちかくなるらん（『山
家集』八七六）

わしの山誰かは月を見ざるべき心にかかる雲しはれなば（『山家
集』八九一）

その他西行の多くの歌からも考えられるところである。左の歌は、そ
のような意味をもつ「月」が「うき世」で見失われる場合を想定して
不安を詠み、右の歌は、そのような意味をもつ「月」が見失われた「う
き世」で生きることのはかなさに触れ、絶望に近い心を詠んでいる。

定家の判詞は、左右の歌に対して、ともに「一定肯定的に批評してい
るのではあるが、積極的に高く評価したところは少ないように見える。

三十四番 左

六七身をすれば人のとがとも思はぬに恨がほにもぬるる袖かな

右勝

六八中々になれぬ思ひのままならばうらみばかりや身につもらまし
左も心あるさまなれど、右、猶優にきこえ侍れば、勝と申すべし。

【通釈】

三十四番 左

六七身の程を知っているから、あの人のつれなさを罪とは思わないのに、恨めしそうに涙でぬれるわたしの袖よ。

右勝

六八打ち解けられずつらい思いのままでしたら、かえって（恋が恨みとなり）恨む心ばかりがわが身に積もることになるうか。

左の歌も思い入れたところのある歌の姿ですが、右の歌は一段と優しいものに思われますので、（右の）勝と判定しましょう。

【注】○身をすれば（取るに足りない）身の程を知っているから。○人のとがとも思はぬに 恋する人のつれなさを、その人の罪とは思わないのに。○中々に かえって。「うらみばかりや身につもらまし」を修飾する。○なれぬ思ひ 打ち解けるに至らないための、つらい恋の思ひ。『西行上人集』、『山家心中集』では「あはぬ思ひ」。

【考察】三十四番の二首は、恋の歌で、わが身の恋の恨みに関して詠む点が共通する。

二首ともに『山家集』『西行上人集』『山家心中集』に見える。『山家集』では左の歌（六八〇、第二句「人のとがには」）、右の歌（六六五）共に「恋」と題する歌群の中に出ている。『西行上人集』でも左の歌（三二四、第二句「人のとがとは」）、右の歌（三三四、第二句「あはぬ思ひの」）共に「恋」と題する歌群の中に出ている。『山家心中集』でも左の歌（一〇一）、右の歌（八八）共に「恋」として分類されている。なお、左の歌は『新古今集』恋歌三（一一三二）に「題しらず」として収められている。

左の歌は、わが身の分際を知っているから、つれない人を恨む心はないつもりだが、「恨みがほに」涙で袖がぬれる、と詠む。「……がほ」は西行の歌にかなり目立つ用語だが、他を恨む筋はないと考えながら恨めしげに涙が流れるという発想とともに、『山家集』恋の部などに見える次の歌と似たところがある。

なげけとて月やは物を思はするかこちがほなるわが涙かな（六二二八）

西行はこの歌を『御裳濯河歌合』（二十八番）に収めているから、こういう詠み方の恋の歌は作者として気に入ったものだったのかもしれない。

右の歌は、解釈に揺れが生じている。『日本古典文学大系』所収の『山家集』では、一首の大意を次のように記す。

打ち解けない恋のままならば、かえって恨みばかりがわが身に積もるだろう。

『新潮日本古典集成』所収『山家集』も、これとほぼ同様の解釈である。これらに対して、『新日本古典文学大系』所収『山家心中集』は、第二句「あはぬ思ひの」の本文であるが、

あのまま逢はぬゆえの苦しみのままだったなら、恋心がかえって怨み心となって身に積もるばかりだったろう。

と解し、「逢恋の題意。恋の成就ゆえ、恋が怨念に変わり、宿執とならずにすんだ安堵と愉悦」と注する。

定家の判詞は、左歌も「心あるさま」と評しながらも、右歌の方が「優」に思われるとして右歌の勝と判定している。しかし『新古今集』では右歌を採らず負けた左歌を採り、撰者名注記のある本によると定家一人が左歌を撰んでいるので、定家は『新古今集』撰歌の時には二首の評価を変えていたと見られる。

【備考】三十四番左歌は『新古今集』（一一三二）に収められている。

三十五番 左持

六九あはれとてとふ人のなどなかるらん物思ふ宿の萩のうはかせ

右

セ〇思ひし人あり明の世なりせばつきせず身をばうらみざらまし

左、寔によりしくはみえ侍るを、右の、人有明の世なりせばつきせず身をばなどいへるや、猶おとると申しがたからん。

【通釈】

三十五番 左持

六九あわれんで訪ねてくれる人が、なぜいないのだろう、——（恋の）物
思いをするわたしの家に、訪れるのは萩の上葉を吹く風ばかりだ。

右

セ〇もし、わたしの物思う心を知ってくれる人がある世だったら、（有
明の月を見て、）尽きることなくわが身を恨むことはなかったであ
ろう。

左の歌は、まことに結構には思われますが、右の歌の、「人有明
の世なりせばつきせず身をば」などと詠んでいるのは、やはり劣
ると申しにくからうかと思えます。

【注】○萩の上風 萩の上葉を吹く風。その音に秋の季節や寂しさを感じ
るものとして詠まれる。「秋はなほゆふまぐれこそただならね萩のう
はかせ萩の下つゆ」（『義孝集』四）は、『和漢朗詠集』（二二九）にも
採られ、特に知られた歌である。○人あり明の世なりせばつきせず
「人あり」に「あり明」を言い懸け、その縁語として「世」に「夜」を、
「尽き」に「月」を響かせたもの。「……人がある世であつたら、尽き
ることなく……」というのが主意で、有明の月はそれに添えたイメー
ジであろう。

【考察】三十五番の二首も、恋の歌で、恋ゆえの嘆きの歌である。

二首ともに『山家集』『西行上人集』『山家心中集』に見え、『新古今
集』にも収められる。『山家集』では、左歌（七〇五）は「恋」と題す
る歌群の中に、右歌（六五二）は恋の部の内「月」の題の歌群の中に
出ている。『西行上人集』では、左歌（三四八）右歌（三四九）共に「恋」
の題の歌群の中に並んで出ている。『山家心中集』でも、左歌（九二
右歌（七八）共に「恋」として分類されている。『新古今集』では、左
歌（一一三〇七）は恋歌四に、右歌（一一四八）は恋歌二に、いずれも
「題しらず」として収められている。

左の歌は、物思いに沈む身を慰めてくれる人がいないのを嘆く
趣で、その寂しく人を待つ心を「萩の上風」によって具象化して詠ん
でいる。

右の歌は、「……せば……まし」の呼応で現実でない事態を想像する
歌い方をしているが、現実には物思う心を知る人はなく、わが身を怨
み続ける外はないと嘆いた作意であろう。修辭上「有明」「夜」「月」を
織りこんだ点が目立つ。この点について『美濃の家づと』は、

人有明といひかけ、つきせず月をいへる、いやしきたくみにて、
いとうるさし。そのうへ有明の月、此歌にいささかもよせなきこ
と也。

と手厳しく批判している。しかし有明の月は、恋に物思う心を託して
歌われることが多く、

今こむといひしばかりに長月のありあけの月をまちいでつるかな
（『古今集』六九一、素性）

などの作例がある。

定家の判詞も、右歌については、その「人有明の世なりせばつきせ
ず身をば」と有明の月を織りこんだ表現に特長を認め、「まことによろ
しく」見える左歌に対して「おとると申しがたからん」と評している。

【備考】三十五番の左右の歌は、共に『新古今集』（一一三〇七、一一四
八）に収められている。

三十六番 左持

セ二逢ふと見しその夜の夢のさめであれながき睡はうかるべけれど

右

セ二哀 哀此世はよしやさもあらばあれこむ世もかくやくるしかるべき
両首の歌、心共にふかく、詞及びがたきさまにはみえ侍るを、右、
此世とおき、こむ世といへる、偏に風情を先として、詞をいたは
らずは見え侍れど、かやうの難は此歌合に取りては、すべてある
まじき事に侍れば、なずらへて又持とや申すべからん。

【通釈】

三十六番 左持

セ二恋しい人に会うと見た、その夜の夢は覚めないでいてほしい、——

(煩惱による) 長夜の眠りは、心憂いことであろうが。

右

七二あ、この世での(恋の苦しみの)ことは、ままよ、どうともなれ。ただ来世も、このように苦しまねばならないのだろうか。

この二首の歌は、共に思入れが深く、表現も(並の作者には)及びにくい姿には思われますが、ただ右の歌で、「この世」と言い「こむ世」と言っているのは、専ら(両者を対照させる)趣向を第一にして、言葉を無造作に用いたものと見えますけれども、このような非難は、この歌合の場合は、すべてあるべきでないことと思いますので、同等に並ぶものと見て、これも持と判定すべきであろうかと考えます。

【注】○ながき睡 ながきねぶり(『平安朝歌合大成』)。仏教に言う「長夜」の睡りで、煩惱から抜け出すことが出来ず、悟りを得られない状態が長く続くことの例え。○よしやさもあらばあれ ままよ、それはそれで構わない。不本意な状態も仕方がないと思いつける気持ちを示す。○こむ世もかくやくるしかるべき 「こむ世」は来世で、「この世」すなわち現世に対して言う。来世もこんな風に苦しまねばならないのだろうか。「来世はかくまでは苦しくなからう」という解釈(窪田章一郎氏『西行の研究』)もある。これは反語として解されたものであろう。○風情 情趣や情調などを指すこともあるが、ここでは趣向。○詞をいたはらず 言葉を細心の注意を払って大切に用いることをせず。この場合具体的にどんな点を言ったかは、「考察」で触れる。

【考察】三十六番の二首も、恋の歌であるが、仏教の見方によった述懐の性質をもっている。

二首ともに『山家集』『西行上人集』『山家心中集』に見える。『山家集』では、左歌(一三五〇)は「恋百十首」の最後に、右歌(七一〇)は「恋」の題の歌群の中に出ている。『西行上人集』では、左歌(三五〇)右歌(三五二)共に「恋」の題の歌群の中に並んで出ている。『山家心中集』でも、左歌(一〇七)右歌(一〇八)共に「恋」と分類さ

れる歌群の中に並んで出ている。なお、左の歌は『千載集』恋歌四(八七六)に「題しらず」として収められている。

左の歌の上の句で、恋しい人に会う夢が覚めないでほしいと願う心は、早くから歌に詠まれていて『古今集』の小野小町の「……夢としりせばさめざらましを」(五五二)の作などが知られている。しかしこの左歌は、下の句に「長き睡りは憂かるべけれど」と言い添えている点に特色のある作であろう。仏教に言う「長夜」の睡りは、煩惱にとらわれて悟りを開き得ない状態が長く続くことで、下句はその方面から恋の妄執に目を向けている。一首はそういう仏者の視点も伴いながら、やはり恋の夢に執着する心を詠んだところに特色が認められると思う。

右の歌も仏教の見方によって現世と来世を対照的にとり上げ、現世の恋の苦しみを宿命とあきらめながら、嘆声を強く響かせている。上の句は、第一句「あはれあはれ」、第三句「さもあらばあれ」と字余りの破調で、現世での恋の苦しみはどうともなれ、という思いを率直に強く表している。そしてそれを受けた下の句は、来世も「かくや苦しかるべき」、このように苦しまねばならぬのか、と嘆いたものであろう。ただし「注」で触れたようにこれを反語と見る解もあり、それによれば、来世はこれほどは苦しくなからう、と来世にわずかに希望を託する形で現世の恋の苦しみを強調したことになる。

定家の判詞は、左右の歌を共に「心ふかく」、「詞及びがたきさま」と評しているが、その上で、右の歌に「この世」と「こむ世」と詠んだのを、「ひとへに風情を先として、詞をいたはらず」と言っている。これは一首が現世と来世とを対照させる趣向を重んじて、「詞をいたはらない表現になっている点を指摘したものであろう。

この右歌について「詞をいたはら」ない表現と言われるのは、具体的に言うとはどんな点であろうか。それは、歌の第一句「あはれあはれ」と第三句「さもあらばあれ」が破調になっていることが示すように、形にとらわれず、思いのままに言葉をつけた点であろう。

なお、「詞をいたはら」ないとされる点を、「この世」「こむ世」に即して考えると、これを歌病と定家が見た可能性もないとは言えないと思う。歌病もいろいろあるが、『俊頼髓脳』に「文字病」の例として挙げる、

みやまには松の雪だに消えなくにみやこは野辺に若菜つみけりの「みやま」「みやこ」の場合に近いと言えるかもしれない。俊成とともに定家も歌病にあまりこだわらない態度をとったが、例えば『千五百番歌合』（七百五十七番）判詞には「鶴膝蜂腰痛」に触れた批評を残している。

【備考】三十六番左歌は『千載集』（八七六）に収められている。

○定家の跋

以下の文章は、歌合の終わりに置かれた定家の跋文である。便宜上、(1)(2)(3)の三つの部分に分けて見ていく。（傍記の異文で（大成）としたのは『平安朝歌合大成』本文を、また（群本）としたのは『群書類従』本を、略記したものである。）

(1) 神風宮河の歌合、勝負をしるし付くべきよし侍りし事は、玉くしげ二年あまりにも成りぬれど、かくれては道をまもる神のふかくみそなはさむ事をおそれ、あらはれては家につたはること葉にあさき色を見えん事をつつむのみにあらず、^{わづかじ} 纔 みそもじあまりをつらぬれど、いまだ六のすがたの趣をだにしらず。おのづから難波津の跡をならへど、さらに出雲八雲のゆくへくらくのみ侍るうへに、もろこしのむかしの時だに、いくももとせのうちとかや、詩人才子の文体三たびあらたまりにければ、ましてやまとことの葉の定まれるところなき心すがた、いづれをよしあしといひ、いかなるをふかしあざしと思ひはかるべしとは、誰に随ひてなにをまこととしるべきにもあらず。時により所につけて、このみよみ、ほめそしるならひにぞあるべき。

【通釈】

(1) 宮河の歌合に、勝負の判定の言葉を書きつけよとの由を（西行上人から）伺いましたのは、二年余り前にもなりましたが、幽微の世界では歌道を守護される神が深い見方で御覧になることを恐れ、現世では家伝の和歌に関する浅い素養を見せることをはばかる思いがあり、その上私はようやく形だけは和歌を詠んでいるけれど、まだ和歌の六義のあり様さえ会得しておりません。たまたま和歌の伝統を学んではいるものの、全く歌道の前途の見通しも立たない私なに加えて、中国の昔でさえ、数百年の間のこととか聞くが、詩人文人の文体が三変したというから、まして和歌の定まった基準とてない内容や表現は、どれを是としどれを否とすべきか、どんな歌を深いの浅いものと考えるべきかという点については、だれの見方により何を真理とすると、知り得るわけがないのです。時と場合にに応じて、好むままに詠んだ歌を、賞賛したり非難したりする慣行に従っているのが、実状でしょう。

【注】○神風 一般に「神風の」「神風や」などの形で、伊勢や伊勢神宮関係の地名などにかかる枕詞として用いられる。この場合も伊勢神宮外宮付近を流れる宮河を修飾する枕詞的な語として置かれたものであろう。○玉くしげ 「くしげ」（くしの箱）の美称であるところから、「ふた」「み」などにかかる枕詞。この場合は「ふたとせ（二年）」にかかる。○かくれては 後の「あらはれては」に対して、顕現していない世界においては、幽微の世界では、の意であろう。○家につたはること葉 家伝の和歌。定家の家系が歌の家である御子左家であるところから言った。○みそもじあまり 三十音余りの形をとる和歌。○六のすがた 『詩経』大序に挙げる詩の六種の体（風・賦・比・興・雅・頌）を和歌に当てはめた、和歌の六種の姿。『古今集』真名序に「和歌有六義」、仮名序に「歌のさま、むつなり」と言う。○難波津 ここでは『古今集』仮名序に「難波津の歌」と言い、他の一首とともに「歌の父母のやうにてぞ手習ふ人のはじめにもしける」と言われる歌。古

注によれば「難波津にさくやこの花冬ごもり今は春べとさくやこの花」。

○出雲八雲 ここでは『古今集』仮名序で人の世における和歌の最初のものとするスサノヲノミコトの歌で、古注に挙げる「八雲たつ出雲八重垣妻きこみごめに八重垣やえがきつくるその八重垣を」(『古事記』上巻、『日本書紀』卷一)。前出「難波津」の歌と並べて、和歌の道の源となる代表的な歌としてとり上げたのであろう。○詩人才子の文体三たびあらたまりにければ『宋書』謝靈運伝論に「自漢至魏四百余年、辞人才子、文体三変」とあるのによる。「才子」はこの場合文才のある人を言ったのであろう。○やまとことの葉 和歌。

【考察】定家はここで、『宮河歌合』の判を西行から求められたのは二年余り前になるが、自分が歌人として未熟である上に、和歌の評価は基準が定まらないことなどを挙げて、判詞の完成の遅れた言い訳をしているようである。これはまだ二十八歳の定家が、大歌人西行の伊勢神宮に奉納する自歌合の判をする立場に置かれて、その本音を伝えたところがあるかと思われる。

そして定家はこの跋文を、ある程度俊成の『御裳濯河歌合』序文を受けて書いているようである。「道をまもる神のふかくみそなはさむ事をおそれ」云々と言うのは、俊成が「住吉明神よりはじめてまつりて、照しみそなはすらむ事、其おそれいくそばくぞや」と記したのに倣ったものであろう。また「難波津」の歌を引き、「いづれをよしあしといひ、いかなるをふかしあさしと思ひはかるべしとは、誰に随ひてなにをまこととするべきにもあらず」と言うのも、俊成がやはり「難波津の歌」を挙げて「よしとはいかなるをいひ、あしとはいづれをさだむべしとは、われも人もしるところにあらざるものなり」と記したのによったものかと思われる。このように俊成の『御裳濯河歌合』に記されたところを受けながら、古代中国の「文体三変」のことなどを加えて、定家はこのあたりの文章を書いていると見られる。

(2) 然るを、此歌合はわざとしづみ思しづみひてあはせつがはれたるにもあら

ず、ただおほくの年来しづみつもれることの葉をひろひて、ならびぬべきふしおし、かよへるところどころ思ひあはせつ、左右にたてられて侍れば、事の心かすかに、歌のすがたたくして、空よりも及びがたく、雲よりもはかりがたし。つもるあはれはふかけれど、雪まの草のみじかきこと葉みだれて、かきあらはさんかたもなく、おもふふししげけれど、浪路のあしのうきたる心のみただよひて、うちいづべくも思う給へられねば、春のあら田かへすがへす思ひやみぬべくのみ成りぬれど、ひじりの契を仰ぎたてまつることも、此世ひとつのあだのよしびにもあらず、仏の道にさとりひらけん朝あしたは先さきひるがへす縁ゆかりをむすびおかんと思ふ。

【通釈】

(2) ところが、この歌合は特に深く考えて歌を番えられた歌合ではなく、(上人が)長年にわたって詠まれた多くの歌の一部を選び、その中で対応しそうな箇所や似通った部分を見比べながら、左右に歌を配置されていますので、その趣意がとらえにくく、歌の姿に高い格調があつて、その品格の高さは空よりも近づきがたく思われ、またその心は雲よりも測りがたいところがあります。(上人の)歌からあれこれと受ける感銘は深いけれど、雪間の草の短いのにも似て(私の)至らぬ言葉は整わず、折角の感銘を書き表すすべもなく、また(上人の)歌について思うことは多いけれど、波路に葦わが浮かんで揺れるように浮動する思いばかりが動き、取り立てて言い得るほどのことがあろうとも思われません。そのため、春の荒田を繰り返し耕すように幾度も考えぬいたあげく判詞の執筆を断念するばかりになったのです。しかし、西行上人との御縁を重んじて判詞を書かせていただくことは、この現世だけの一時的な御縁にとどまらないので、仏道において悟りを得られる時には、まず、私も心を一変して悟れるような縁を上人と結んでおきたいと思うのです。

【注】○しづみ思ひて 沈思して。深く考えて。○つもれることの葉をひろひて 詠みためられた和歌の中から採り上げて。「ことの葉」は、

ここでは和歌の意であるが、その「葉」と縁のある語として「つもる」「ひろふ」を用いた。○事の心 趣意。『古今集』仮名序に「うたのさまをしり、ことの心をえたらむ人」の用例がある。○雪まの草のみじかきこと葉 「雪まの草の」は序詞として「みじかき」にかかる。「みじかきこと葉」は、劣った言葉、至らぬ言葉。○浪路のあしのうきたる心 「浪路のあしの」は序詞として「うきたる」にかかる。「うきたる心」は、浮動する心、確たるところのない思い。○春のあら田かへすがへす思ひやみぬべく 「春のあら田」は序詞として「かへすがへす」にかかる。春に荒田を掘り返して耕すところから用いた。「かへすがへす思ひやみぬべく」は、何度も繰り返し考えたあけく断念する意であろう。○あだのよしび 一時的なかりそめの縁。「よしび」は「よしみ」と同じで、人と人とのつながり、縁。○ひるがへす縁 迷いにおちいつていた心を一変して悟りに達するための縁。

【考察】ここでは、この歌合は西行が多年にわたって詠んだ歌から自撰して歌合としたもので、その歌を把握するのは難しく、定家自身の力量不足もあって判詞の執筆を断念しそうになったが、西行上人との縁を仏道で悟りを得るための縁として重んじたい旨を述べて、これを判詞を書いた動機の一つとしている。

文章は対句や序詞などを用いて修辭上の工夫をこらした点が目立っている。

(3) 又はたかきいやしきそこの道好む輩をおきて、よはひいまだみそちにおよばず、位猶五のしなにしづみて、みかさの山の雲の外に、ひとり拾遺の名をはぢ、九重の月の下に、久しく陸沈のうれへにくだけたる、あさぢの末、むぐらの下の塵の身をたづねて、浦のはまゆふかさなれるあと、まさきのかづらたえぬ道ばかりをあはれみて、鈴鹿の関のふりはへ、八十瀬の波のたちかへりつつ、思ふゆゑあり、猶かならずつとめおけと侍りしかば、宮川のきよきながれに契をむすばば、位山のとどこほる道までも、その御しるべや侍るとて、い

まさきのちみん人のあざけりをしらず、むかしをあふぎふるきをしのぶ心ひとつにまかせて、かきつけ侍りぬるになむ。

【通釈】

(3) それにまた、貴賤を通じて多くの歌道を好む人々がいるのを差し置いて、(私のような) 年はまだ三十に及ばず、位はなお五位より上に進み得ず、近衛府の官職にも就けずに、ひとり侍従の名のままでいることを恥じ、宮中にあって久しく世に合わない嘆きに悩んでいる、浅茅の末や葎の下（ちぐさ）の塵同然の(取るに足りない)者を、(西行上人は) たずねられました。そして、(私が) 浦の浜木綿（うらのまぎわ）の葉の重なるように代を重ねた歌の家の後継者である点、またまさきのかずらの蔓の長いように長く絶えない歌の道にかかわる点を(上人は) 専らあわれんで、わざわざ、繰り返し返して、思う子細がある、やはり必ず判者を務めておけと言われました。そこで、(この歌合の奉納される) 宮川の清流のほとりに鎮座される伊勢の神に御縁を結べば、官位の昇進が滞っているようなことについても、神の導きがあるかと存じまして、現在また将来これを見聞きする人のあざけりも顧みず、古い昔からの歌の伝統を尊びしのぶ心のみを頼りにして、この判詞を書き付けた次第です。

【注】○位猶五のしなにしづみて 位が五位から上がらない状態であったことを言う。定家は一一六六年に五歳で従五位下、一一八〇年に十九歳で従五位上、一一八三年に二十二歳で正五位下という風で、一一九〇年、二十九歳に至り従四位下に叙せられている。○みかさの山の雲の外に 近衛府の官職に縁のない状態を言ったのであろう。「みかさの山」は、近衛の大将、中将、少将などの称。天皇の御笠（みかさ）となつてそば近くで警衛に当たるところから言われる。(用例は『後撰集』一一〇六番歌など) ○拾遺 侍従の唐名。定家は一一七五年に十四歳で侍従に任じられ、その後久しく新しい官職を得なかった。一一八九年十一月、二十八歳で左近衛少将に任じられるが、これは『拾玉集』(五一五〇、五一五一後記) によれば、『宮河歌合』判の完了後のことである。○陸

沈世に合わないこと。○浦のはまゆふかさなれるあと「浦の浜木綿」は、葉の重なるところから「かさなれる」にかかる序詞。「かさなれるあと」は、代を重ねた歌の家の後継者。○まさきのかづらたえぬ道「まさきのかづら」は、蔓の長く延びているところから「たえぬ」にかかる序詞。「たえぬ道」は、長く続いて絶えない歌の道。○鈴鹿の関のふりはへ「鈴鹿の関」は今の三重県鈴鹿市の峠付近に置かれた関であるが、「鈴鹿の関の」は、その「鈴」が「振る」に縁があるところから「ふりはへ」にかかる序詞。「ふりはへ」は、わざわざ。○八十瀬の波のたちかへりつつ「八十瀬の波の」は、多くの瀬に波が立つところから「たちかへり」にかかる序詞。「たちかへり」は、繰り返し。○宮川のきよきながれ「宮川」は、今の三重県中南部を北東に流れて伊勢湾に注ぐ川。伊勢神宮の外宮付近を流れることから、ここではその清流を言うことで外宮の神を示した。○位山今の岐阜県の北部にある山で、飛驒の国の歌枕。和歌では主に位の昇進を山に登るのに例えて言う場合に用いられる。

【考察】定家はここでは、自分などは取るに足りない者であるが、西行上人が歌道の後継者と認めて『宮河歌合』の判詞を書けと言われるので、この歌合が伊勢の神に奉納されたら官位昇進へのお導きもあろうかと思ひ、これを書いた旨を記している。

文章は、前の部分に引き続いて対句や序詞を多く用い、修辭上の工夫をこらして述べている。

以上の定家の跋文を、『御裳濯河歌合』の俊成の序文と対照すると、筆者による内容の相違が特に強く感じられるのは、この終わりの部分ではなからうか。俊成の序文の最後に記された感想には昔をしのぶ感傷的な気持ちがあるが、定家の場合にはそういう感傷はなく、現実的な官位昇進についての嘆きや願ひなどが書かれている。これは俊成が大歌人の地位を確立した老境にあり、西行との長年の交友関係を回顧する立場にあったのに対して、定家は自意識の強い青年として、自分の理解者と思われる大先輩の西行に対し、身の不遇を訴えたところ

があると思う。

○定家と西行の贈答歌

『宮河歌合』の奥に、定家と西行の贈答歌が見える。

七三君はまづうき世の夢のさめぬとも思ひあはせむのちの春秋

返し

七四春秋を君おもひいでは我は又花と月とにながめおこせん

【通釈】

七三あなたはまず、憂き世の夢から覚めて悟られたとしても、（この歌合の判をした）私のことを思い合わせてくださるでしょう、——この後の春秋につけて。（定家）

返歌

七四春秋を、私に関して、あなたが思い出してくださいるなら、私はまた花と月とにつけて、歌を詠んでお届けしましょう。（西行）

【注】○思ひあはせむ「君」（西行上人）は思い合わせることでしよう、の意か、私（定家）は思い合わせましょう、の意か、どちらとも解せそうである。西行の返歌に「君おもひいでは」と定家が思い出すことを言っているのがこれと直接結びつくと思えば、後者の解が妥当なように見える。しかし、一首の上句「君はまづうき世の夢のさめぬとも」という条件に應じる内容を表す語句としては、やはり前者の解の方がよい。【通釈】は前者の解によった。

【考察】『宮河歌合』の判を終えた後に定家が西行に贈った歌と、それに應じて西行が定家に返した歌として記されたものである。

一々挙げなかったが本文の異同が多い上に、私信のやりとりといった歌なので、歌意が通じかねるところもある。それで参照し得た三人の方の解釈（渡部保氏『山家集全注解』、松野陽一氏『鑑賞日本古典文学第17巻』、久保田淳氏『訳注藤原定家全歌集』）も、それぞれ異なっている。ここに記した「通釈」も私見で妥当と考える解釈によったが、

作者の本意を正しく伝えているという保証はない。

ただ定家の歌は、すでに指摘されているように、『源氏物語』の明石の巻に見える光源氏の次の歌の言葉を取り入れて詠んだ作であろう。

むづことを語りあはせむ人もがなうき世のゆめもなかはさむやと

(二二九)

また定家は、仏道と歌道の大先輩である西行への敬意をこめて真剣に一首を詠んでいると思われる。これに対して西行は、円熟した自由な心で定家の歌を受け入れ、それについて思うところを自然な形で返歌にしているようである。